



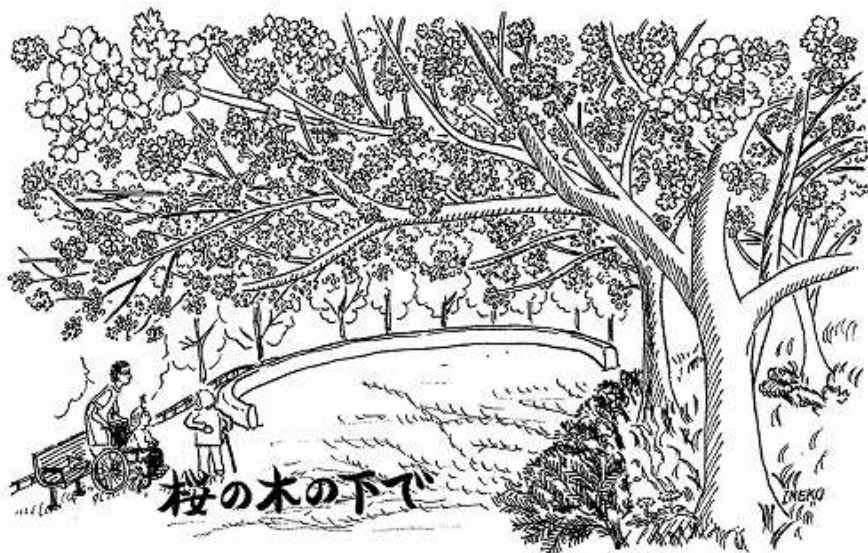
2015年4月15日発行（季刊）



# う 羽 化 か

ISSN1880-8646  
2015年4月  
第102号

横 浜 漢 点 字 羽 化 の 会  
〒231-0851 横浜市中区山元町2-105 Tel 045-641-1290  
発行責任者 代 表 岡 田 健 嗣  
編集責任者 木 下 和 久



## 目 次

漢点字の散歩 (39) (岡田健嗣) .....	1
史料徹底検証 尖閣領有 あとがき (村田忠禧) .....	8
東京漢点字 例会報告とわたくしごと (木村多恵子) .....	16
東京漢点字 学習会報告 (菅野良之) .....	22
漢文のページ .....	27
ご報告とご案内 .....	29
編集後記 (木下和久) .....	31

# 漢点字の散歩（三十九）

岡田 健嗣



## 漢点字、習得以前と以後

約二十年前、本誌の発刊に当たって私が企としましたことは、表現の難をお許しただけですならば、この表題のようなことでした。

と申しますのは、私が漢点字を学んだ一九七八年来、皆様に漢点字のお話をさせていただく度にいただくご質問が、「漢点字を学んであなたはどうか変わったのですか?」、「漢点字を学ぶ以前のあなたと、漢点字を学んでからのあなたは、どこが違いますか?」というものでした。ところがそれに、満足にお答えできなかったことがあります。「漢字を知らなかった自分から、漢字を知った自分が変わりました」とお答えするのが精一杯で、その次に「そう変われたら、どのようなところがよくなりましたか?」というご質問が待っているのです。そのような問いを詰めて行きますと、畢竟「よくなった」というのは、あなたの個人的な変化で、自己満足ではないでしょうか」という結論が目の前に差し出されます。つまり、漢点字を学んで漢字の世界を知ったとしてもそれはあなたの満足であ

って、漢点字を学ばない視覚障害者に、漢点字を学ぶことを強要できる理由はそこにはない、漢点字を学ばない権利があるとして、その権利を侵してまで漢点字を学ぶことを他人に勧める権利は、あなたにはありません。精々あなたが個人的に、「漢点字を学ぶと、漢字の世界が開けて、本がより深く読めるようになります」と主張できるだけです、という結論に至ります。現在の私どもの置かれている状況は、正にこのようなものだと言つてよいと思われます。

そして勿論、常に申し上げておりますが、一般には、非識字の状態は解消されるべきとされているにも関わらず、大半の先天の視覚障害者は、この非識字の状態に放置されているのが現状であること、そのことは全く不問のままに置かれていることだけは、ここに付加しておきたいと思ひます。

先の問いにどうしてお答えできないでいるか、これは私にとつて、極めて重要な課題であります。これまでも繰り返し試みて参りましたが、不十分に終わる可能性を恐れずに、今回も、再度漢点字を学ぶ以前と以後との変化について、考えてみたいと思ひます。

これを考えるに当たつて、私と漢点字の出会いについて、これも再度申し上げなければなりません。

私が漢点字の存在を知ったのは一九七八年、ある点

字雑誌に、漢点字の通信教育の学習者の募集記事を偶然見出したことにあります。早速川上先生にお手紙を差し上げて、通信教育に挑みました。

私は盲学校で初等・中等教育を受けて、漢字の知識なしに社会に出たのですが、当時は盲学校と社会との落差に翻弄されていた最中で、それを何とか乗り越えなければいけないと、原因の一つが、自らの非識字状態にあると捉えていたところでした。ところがその非識字を解消する方法が見つからず、いたるところへ、この雑誌の記事との出会いでした。

無事通信教育を終えて、当時の当用漢字の漢点字を習得してみると、漢字の世界が一举に爆発的に開けたのでした。ここに至ってつい過去を振り返ってみても、どのように本を読んでいたのか、全く覚えていないことに気づかされました。勿論当時は、漢点字の書物は極少なく、従来のカナ点字の点訳書か、音訳書に頼って読書していたのですが、それでも漢字の知識を得る前後では、全く違った読みになっていったようでした。それがどう違っているのか、これまで申し上げられずにまいりましたが、ここで皆様にも、体験していただいで、ご理解を賜りたく存じます。

ただしその体験と申すのも、厳しい条件があります。その条件とは、漢字の知識のない状態で左の文章

を、読んでいただくというものです。がそうは申ししてもこの条件を満たす方は、本誌の読者諸兄妹の中にはほとんどおられないと思われます。斯申す私も、漢点字の学習以後この条件から外れてしまいましたし、この条件を実現することは、原理的に不可能です。そこで皆様にはご自身に、漢字の知識はないものという、仮の状態を設定していただいた上で、左の文章に当たっていただきたくお願い申し上げます。

その文章と申しますのは、今回横浜市中央図書館に納入致しました『萬葉集釋注』第三卷（伊藤博著、集英社文庫）の、伊藤先生の「釈文」の一部です。本文は山上憶良の「嘉摩三部作」の二番目の歌で、あの有名な「銀も 金も玉も 何せむに まされる宝 子に 及かめやも」（八〇三）の反歌を伴う長歌（八〇二）の題詞です。その本文は左の通りです。

《釈迦如来（しやかによらい）金口（こんく）に正（ただ）に説（と）きたまはく、「等（ひと）しく衆生（しゅじやう）を思ふこと羅睺羅（らごら）のごとし」と。また、説きたまはく、「愛は子に過ぎたることなし」と。

至極（しごく）の大聖（たいせい）すらに、なほ子を愛したまふ心あり。いはむや、世間（せけん）の蒼

生（さうせい）、誰れか子を愛せずあらめや。》

左が伊藤先生の「釈文」にある解説文です。まず漢字仮名交じり文を、その次に漢字の部分平仮名に置き換えて、なお従来のカナ点字の表記法に沿って、棒引き仮名遣いと分かち書きにしてあるものです。両者ともに内容は同じものとされますが、読み比べていただければ、その相違に、お気づきになられるものと存じます。

●嘉摩三部作の第二群。子に対する愛情をうたった作として、すこぶる著名。しかし、仏教では、一つのもの、とくに我が子などに執着することは煩惱の代表的なもので、道にもとるとされた。仏教に明るかった憶良はそのことをよく知っていて、右の作においても、「子等を思ふ」ことが愛欲の煩惱であることを充分知りながら、しかも、現世の一個の人間としては子への愛着に執（とら）われざるをえない悩みをうたっている。一群は、単純な親の愛情を述べたものではなく、子を愛することの苦悩を主題にしているのである。

その序文は、意を通すと次のようになる。

釈尊が御口ずから説かれるには、「等しく衆生を思

うことは、我が子羅睺羅を思うのと同じだ」と。しかしまた、もう一方で説かれるには、「愛執は子に勝るものはない」と。

この上ない大聖人でさえも、なおかつ、このように子への愛着に執られる心をお持ちである。ましてや、俗世の凡人たるもの、誰が子を愛さないでいられようか。

至極の大聖さえ、教理は教理として、子への愛に執られる心をお持ちであった。ましてや、自分のような凡愚が子に執られるのはやむをえない。という次第で、憶良は、子への愛の歌八〇二〜三をうたう申しわけをここで述べている。一種の弁解であり、それだけに、我が子への愛着をうたうことに対して、憶良が苦悶を抱いていたことが知られる。しかも大切なことは、「等しく衆生を思ふこと羅睺羅のごとし」という、慈愛の精神を説く言葉は、むしろ仏典の至るところに見えるけれども、「愛は子に過ぎたることなし」という発言は、仏典に、釈迦の言葉としては見られないといわれていることである。憶良が仏典を誤解したのか、それとも、憶良があえて推量して、釈迦といえども内心に子への煩惱があつたはずだと考えたのか。いずれかはつきりしない。

いずれにしても、憶良が歌詠の抛り所とした「愛は子に過ぎたることなし」という言葉は、憶良が勝手に作り出したものと考えられる。そういう作りごとまでして依り付く柱を求めるほど、憶良は、我が子に執われることの罪を意識していたわけである。

○かま 3ぶさくの だい2ぐん。 こに たいする あいじよーを うたつた さくと して、すこぶる ちよめい。 しかし、ぶつきよーでわ、ひとつのもの、とくに わが こなどに しゅーちやくする ことわ ぼんのーの だいひよーてきな もので、みちに もとると された。 ぶつきよーにあかるかった おくらわ その ことを よく して いて、みぎの さくに おいても、「こらをもふ」 ことが あいよくの ぼんのーで ある ことを じゅーぶん しりながら、しかも、げんせの 1この にんげんと してわ こえの あいちやくにとらわれざるを えな い なやみを うたつて いる。 1ぐんわ、たんじゅんな おやの あいじよーを のべた ものでわ なく、こを あいする ことの くのーを しゅだいに して いるので あ

その じよぶんわ、いを とおすと つぎの よー

になる。

しやくそんが おんくちずから とかれるにわ、「ひとしく しゅじよーを おもう ことわ、わがこらごろを おもうのと おなじだ」と。 しか また、もー いっぱーで とかれるにわ、「あいしゅーわ こに まさる ものわ ない」と。 この うえ ない だいせいじんでさえも、なおかつ、この よーに こえの あいちやくに とらわれる ところを おもちで ある。 ましてや、ぞくせの ぼんじんたる もの、だれが こを あいさないで いられよーか。

しごくの たいせいさえ、きよーりわ きよーりとして、こえの あいに とらわれる ところを おもちで あつた。 ましてや、じぶんの よーな ぼんぐが こに とらわれるのわ やむを えな い。 と いう しだいで、おくらわ、こえの あいの うた 802う3を うたう もーしわけを ここでのべて いる。 いっしゅの べんかいであり、それだけに、わが こえの あいちやくを うたう ことに たいして、おくらが くもんを いただいていた ことが しられる。

しかも たいせつな ことわ、「ひとしく しゅじ  
よーを おもふ こと らごらの 「ことし」と い  
う、じあいの せいしんを とく ことばわ、むろん  
ぶつてんの いたる ところに みえるけれども、  
「あいわ くに すぎたる こと なし」と いう  
はつげんわ、ぶつてんに、しゃかの ことばと して  
わ みられないと いわれて いる ことである。

おくらが ぶつてんを ごかい したのか、それ  
とも、おくらが あえて すいりよー して、しゃか  
と いえども ないしんに こえの ぼんのーがあ  
った はずだと かんがえたのか。いずれか はつき  
り しない。

いずれに しても、おくらが うたよみの よりど  
ころと した 「あいわ くに すぎたる こと な  
し」と いう ことばわ、おくらが かつてに つく  
りだした ものと かんがえられる。そー いう  
つくりごとまで して よりつく はしらを もと  
めるほど、おくらわ、わが くに とらわれる こと  
の つみを いしき して いた わけで ある。

以上、この二つの文章は、従来の点字の側から言え  
ば、全く同じものだと言われます。しかも残念ながら  
その見解に、表だつて異を称える人はおられません。

そうは申しでもご覧のように、文面は全く異なってい  
ます。にも関わらず、どこが異なっていて、どこが異  
なっていないのか（？）、それが質されたことは、今  
日まで一度もありませんでした。そして私個人として  
は、そこを解くことで、漢点字習得前後の私の変化  
（自覚的にも非自覚的にも）を、明るみに引き出すこ  
とができるのではなからうか、そう考えております  
し、私自身、そのように願つてもいる次第です。

私は本誌の誌面をお借りして、大分以前より、「読  
むことのメカニズム」、あるいは「読書のフィードバ  
ック」などというものを申し上げて参りました。粗略  
にしてなお稚拙なものではありますが、これを再度、  
組上らせてみたいと思います。

私が読書という行為のメカニズムをどう考えればよ  
いかと考えるようになったのは、盲学校にいるころに  
は遭遇しなかつた光景に、それまでの私の周辺には到  
底存在しなかつた光景に、社会に出てから、あるいは  
もつと大学で、出会つたことによります。それはどう  
いう光景であつたか、一般には決して珍しいものでは  
ありません。人が本を読む姿、本のページを見つめな  
がら、そこにある文章を如何に理解すべきかを、じつ  
と思案する姿でした。そうか、本を読むということ  
は、こういうことだつたのか、というのが私の第一印

象でしたし、誰にも言えないほどの衝撃でもありません。その痕は今日に至っても私の中に残っておりません。である以上、そのような読書が、どうして彼にはできて、私にはできないのか、このことを解明しなければ、本など読んでも何もならない、私自身にそのような読書がでなければ、読書をする意味がない、そう思うようになったのでした。その後は勿論従来のカナ点字書を読んだり、音訳書を読んだりする時に、極力そのような読みをすべく心がけたのですが、その努力は極めて困難であることを認識させられただけでした。漢字の知識なしに、日本語の文章を、漢字を用いないものに書き換えられたものを相手に行うのは、じつと見つめて理解を深めるという読書には、誠にほど遠いものがありましたし、読書をする前に、文字を習得しなければ何も始まらないという認識に至るのに、時間はかかりませんでした。と申すよりむしろ、日本語を表記する文字として漢字という文字が大きな位置を占めていることは、盲学校に生活しているころにも充分分かっていたことで、ただにそれを習得する手段が閉ざされていることからか、意識に潜在してしまっていたであろう漢字習得の願望が、顕在化したということだったと思われます。そうこうしているうちに漢字の存在を知り、その習得を志すようになりま

す。が、漢点字の習得への意欲も、このような経験の中から湧き出したものに違いありません。

漢点字を習得して、本会の活動を始めて、漢点字を触読することで書物を読むことができるようになってみると、私に初めて読書の意味が理解できるようになりました。多くの人が、自明の行為として、書物のページをじつと見つめて、無言のうちに文字や文章との交換を行っている姿、目と文字との間の交換、漢点字はそれに匹敵する交換を、指先の触覚と漢点字の間に実現していることに、徐々に気づかされました。このような読書を積み重ねることができるようになってみて、さらに一つの発見に結びついて参ります。ロラン・バルトのいう「テキストの解放」、「テキストの自由」、テキストは、著述された直後に著者から解放されて、どのように読まれようと、たとい著者の意図しない読まれ方をされようと、著者にはそれを咎める権利はない、ただ著者自身も一読者となつて、テキストと対面できるだけだということを、納得できたのでした。と申すのも、テキストを読むということは、決してテキストから一方通行に私にその内容を伝えて来る、あるいは意味が勝手に私に注ぎ込まれるというものではなく、読者である私からもテキストに働きかけ、さらにテキストから私へ…、それを繰り返すこと

で、理解と思考が深化させられるものだったからです。このことを私は「読書のフィードバック」と呼んだのでした。一つのテキストは、百人の人が読めば百通りの読み方ができますし、「読書百遍」という言葉があるように、一つのテキストを繰り返し読むことで、その当初には思いもかけなかった読みに到達することも、珍しいことではありません。

しかし繰り返し返しになります。日本語を母語としている私どもにとつては、漢字仮名交じり文を読みこなさない限り、このようなフィードバックのプロセスは、実現できません。私の経験から申せば、漢点字の習得とその触読による読書は、一般の視読による読書と、速度こそ遠く及びませんが、フィードバックの可能性において、充分その質を保障してくれます。漢字の知識のないころのカナ点字書や音訳書の読書では、どう努力しても叶いませんが、漢点字の触読による読書は、視覚障害者に書物の世界を能うる限り広げ・深めてくれるという確信を、得ることができました。

「漢点字を習得する以前と以後とは、どのように変わりましたか？」というご質問から始めました拙文も、一つの結論に到達した思いがします。先にも申しましたように、漢字の知識のないころは、そのことで大変苦しんでおりました。漢点字を習得して、さらに

本会の活動を通して漢点字書を読むことができるようになって、ふと以前を振り返ってみると、そのころどのようにして本を読んでいたのが、全く思い出せなくなっていたのでした。そんな状況がどうして招来したのか、実に不可思議ではありますが、恐らく文字の知識なしに本を読むということが、文字の知識を得てから振り返って見れば、「無」に等しいものだったということだと、取りあえず理解してよいように思われます。

以上、これが現在の私が申し上げることのできる全てです。障害者教育に取り組んで下さっている皆様、障害者を一人前の人間として社会に送り出すのであれば、一般の社会人と何が変わらない人間として送り出すのであるならば、一般の社会人に求められているものを、障害者にも隔てなく求めていただきたいと思えます。取り分け視覚障害者には、文字を解放していただきたい。そのためには、視覚障害者教育に当たっておられる皆様、正面からこれに取り組んでいただく必要がございます。まずは教育者が立ち上がらなければ、これは永遠に叶わないままに置かれることになるでしょう。まずは現在の先天の視覚障害者は「非識字者」であるという規程を共通理解としていただくことを、願って止みません。



この一月に、横浜国立大学名誉教授の村田忠禧先生が、花伝社から、『史料徹底検証 尖閣領有』を上梓されました。左はその後書きです。一般のメディアからは伝わらない情報に基づいた議論が展開されております。是非一冊手にお取り下さい。

## 史料徹底検証 尖閣領有 あとがき

村田 忠禧

2013年6月に『日中領土問題の起源 公文書が語る不都合な真実』を上梓した後、日本の「尖閣諸島」領有後に発生した問題をまとめる積もりでしたが、途中から1885年から1895年までの日本の領有経緯的を絞ったものに変更した。その理由は「はじめに」の部分で書いたので、ここでは繰り返さない。内容的に重複する部分があることは事実だが、これまで見逃していた事実の発見、それに基づく新解釈が存在しているし、日本の領有過程をいっそう明確にすることができたと思っている。

特に注目すべきは1885年に山県有朋内務卿が最初に出した内命は、沖縄本島の東方に位置する無人島・大東島への取調ではなく、沖縄県近海無人島の取調

であった。したがって西村捨三沖縄県令は早い段階から沖縄本島の西方、清国福州との間に散在する無人島への取調の内命があることを意識していた。この事実気づいたことで、それまで疑問に思っていたことが面白いように解けていった。第3章以降の展開には新味がある、と筆者は自負している。しかしこの点は読者のみなさんの判定を待つべきであろう。巻末に収めた付録史料は貴重である。日本の尖閣領有過程を知るためだけでなく、当時の日本の沖縄政策を考えるうえでも役立つであろう。西村捨三口述の『御祭草紙』は沖縄関係箇所だけを掲載したが、他の部分も読むと実に面白い。この人物は研究に値する。日本近代史の専門家による本格的な研究を期待している。

前著の出版からおよそ1年半が過ぎた。この1年半、日中関係はきわめて憂慮すべき状態が続いてきた。その原因は安倍首相の靖国参拝に代表される「歴史認識問題」と尖閣諸島・釣魚島をめぐる「領土問題」であるとされている。日韓関係もきわめて不正常で、こちらは「従軍慰安婦問題」が主な原因とされている。いずれも一本の太い糸で繋がっている。それは過去とどう向き合い、未来をどう築いていくのか、ということである。

中国は2014年9月3日に「中国人民抗日戦争勝利記念日」69周年式典を行った。今年は70周年。日本

が「尖閣諸島」（当時、そのような呼称はなかったが）をこっそりと「領有」してから120周年でもある。いずれも過去とどう向き合い、未来をどのように築いていくのかを考えるいい材料である。習近平総書記が9月3日の69周年記念座談会で行った講話はインターネットで公開され、筆者もそれを読んだ。翌9月4日に『人民日報』東京支社の記者からメールが届き、今夜10時までに習近平講話についての見解を4000字程度で書いてほしい、との依頼を受けた。急な話で、4000字程度という短文を、しかもその日の晩10時までにまとめるのは大変である。断ろうと思ったが、中国が9月3日を抗日戦争勝利記念日としていることに筆者は異論がある。この機会にそれを伝えたいと思い、以下の文章を書いた。『人民日報』側からすれば「的外れ」の内容なので「ボツ」になるであろうことは予期していた。ただ一つの「異見」として伝えられただけである。

### 過去を重んじるのは新しい未来を創るため

われわれは同じ地球に生きているが、国家という枠からまだ自由ではない。政治、歴史、文化、環境が異なるだけでなく、生活水準、教育程度も各人各様である。見解の相違、対立が発生するのは自然なことである。同一の物体でも角度によって見え方は異なるし、

ましてや顕微鏡、望遠鏡を通せば、まるで別世界に見える。認識の一致を性急に求めてはならない。

過去を感情に頼って語ってはならず、事実に基づく客観的認識が必要である。事実を尊重する理知的誠実さがあれば、事実の共有化は実現できる。事実の共有化ができれば、認識も次第に共有化していく。しかし現実世界は多元・重層的で、共有化すべき事実は無限に存在する。真偽の識別や軽重の取捨選択が必要だ。この作業を国家の枠を越えて共同で行い、成果を人類全体に公開していくことが望ましい。それが実現できれば、過去は未来を切り開くための貴重な財産として生まれ変わるであろう。

筆者が9月3日を抗日戦争勝利記念日とすることに異論を唱える理由は以下の通り。日本では昭和天皇がラジオ放送を通じて国民に戦争の終結を伝えた8月15日を「終戦（敗戦）」記念日としている。中国が9月3日を抗日戦争勝利の日とするのは、中華民国政府がその日を休日にしたことに由来する。しかし抗日戦争勝利の日、すなわち大日本帝国敗北の日は、東京湾に碇泊したミズーリ号上で、大日本帝国代表が連合国側にたいし降伏文書に署名した9月2日とするのが常識である。8月15日にしろ9月3日にしろ、自国民向けであるという点では共通している。こうした思考方法、行動様式のままでは認識の共有化は不可能であ

る。

「戦争を知らない世代」が大半を占める時代になった、とよく言われる。筆者も戦後生まれの一人。筆者のような世代の人間は、ごく普通の労働者、農民が軍国主義「教育」の結果、平気で人殺しをする「鬼」となって多くの罪を犯したみずからの体験を、涙ながらに告白して戦争の罪悪、平和の尊さを訴える元兵士に接することができた。人間としての魂を取り戻した彼らの勇気ある発言から、戦争体験のない世代であっても、戦争とは何かを真剣に考えた。

しかし歳月の経過とともに戦争の「語り部」は次第に舞台から消えていく。「戦争を知らない世代」が大半になり、若者はアニメやゲームで仮想の「戦争」を楽しんでいく。時の流れとともに戦争の傷痕が薄らいでいくのは現実であり、止めようがない。遠ざかる過去を見渡すには、より高い地平に立つ必要がある。感性に頼った認識だけでは断片的、部分的なものに終わる恐れがある。理性に基づく認識になってこそ、認識は普遍性を持つことができる。しかし理性に基づく認識には事実の裏付けが不可欠である。事実を尊重する精神があれば、冷静で客観的にものごとを見ることのできるようになる。戦争と平和の問題を人類共通の課題とするために、国境や民族といった垣根を可能な限り低くして、共同して、多角的、多面的、総合的に考える環境を作る必要がある。そのためには自国第一の

視点から解放される必要がある。そのようなことを伝えたかったのが上述の拙文である。

本書の原稿をほぼ開き終えた10月26日、神奈川大学で開催された日本現代中国学会全国学術大会で「日本の『尖閣諸島』領有にいたる経緯を検証する」と題する報告を行った。4月17日に台北の中央研究院近代史研究所主催の「多元視野下的釣魚台問題新論」国際シンポジウムで行った「日本の『尖閣』領有過程の検証」という報告をベースにしたもので、本書の骨格部分でもある。台湾でのシンポジウムは先方から要請されての報告だったが、日本での報告は自由論題報告に応募することで実現したものである。日本の学会ではこの問題を学術問題として正面から議論するのを避ける傾向が強いことに不満と不安を覚えたからに他ならない。幸い、多くの会員が報告を聞いてくださり、有意義な意見交換ができた。

そのあと、原稿がほぼ書き終えたので11月4日から15日まで中国訪問を行った。北京大学歴史学系の王曉秋先生ご夫妻と5月に沖繩を訪れたことがあり、王先生から北京大学で報告をするよう求められていたので、約束を果たすべく、まずは北京を訪れ、北京大学と中国国際問題研究院でそれぞれ報告を行った。報告は10月の現代中国学会での報告用に使ったPPTを用い、拙い中国語で行った。北京大学歴史学系では収容人員70名程度の教室だったが、100名を越す聴衆が

参加してくれた。講座が夜開かれたことも影響したのである。学外からの参加者も多く、活発な質疑応答が展開され、真剣かつ愉快な交流ができた。

10日に武漢に行く予定であったが、APEC首脳会議開催の影響で北京市は7日から臨時休日。北京についても交流ができない。幸いなことに大連理工大学、さらには東北大学からお誘いがあったので、7日に飛行機で大連入りし、その日の午後、大連理工大学の日本語科の学生を対象に講演を行い、翌日は高速鉄道で瀋陽まで行き、東北大学の日本語科の学生を対象に講演を行った。両校とも日本語による報告であった。9日に大連に戻り、10日に武漢に飛び、武漢大学で一日目は日中領土問題について、二日目は胡徳坤・武漢大学辺界与海洋研究院長と「日中関係の過去、現在、未来」をテーマにした一種の「トークショー」。1946年生まれの二人がそれぞれの歩んできた道と今後の日中関係についての思いを語った。そのあと武漢からおよそ250km西にある宜昌市五峰土家族自治県へ個人旅行に出かけ、少数民族・土家族の農家を訪れ、お手製の地元料理を御馳走になった。食後、静かな山村にあるその農家の前庭で椅子に腰掛けしぼしの間、日なたポッコをし、お蔭で旅の疲れも癒された。

こうして中国各地をあわただしく回って交流をしていた折、北京ではAPEC首脳会議を直前に控えた11月7日、日中両国政府の外交当局者が「日中関係の改

善に向けた話合い」という4項目の合意文書を交わした。以下に示す前半は日本の外務省が公表したもの、後半の中国語は新華社が公表している内容である。

日中関係の改善に向け、これまで両国政府間で静かな話し合いを続けてきたが、今般、以下の諸点につき意見の一致をみた。

1 双方は、日中間の四つの基本文書の諸原則と精神を遵守し、日中の戦略的互恵関係を引き続き発展させていくことを確認した。

一、双方确认将遵守中日四个政治文件的各项原则和精神、继续发展中日战略互惠关系。

2 双方は、歴史を直視し、未来に向かうという精神に従い、両国関係に影響する政治的困難を克服することで若干の認識の一致をみた。

二、双方本着「正视历史、面向未来」的精神、就克服影响两国关系政治障碍达成一些共识。

3 双方は、尖閣諸島等東シナ海の海域において近年緊張状態が生じていることについて異なる見解を有していることを認識し、対話と協議を通じて、情勢の悪化を防ぐとともに、危機管理メカニズムを構築し、不測の事態の発生を回避することで意見の一致をみた。

三、双方认识到围绕钓鱼岛等东海海域近年来出现的紧张局势存在不同主张、同意通过对话磋商防止局势恶化、建立危机管控机制、避免发生不测事态。

4 双方は、様々な多国間・二国間のチャンネルを活用して、政治・外交・安保対話を徐々に再開し、政治的相互信頼関係の構築に努めることにつき意見の一致をみた。

#### 四、双方同意利用各種多双边渠道逐步重启政治、外交和安全对话、努力构建政治互信。

この四項目の合意文書が交わされたことで、11月10日の日中首脳会談は実現した。わずか25分間という短時間のもので、別に新味があったわけではない。ドアは常に開けている、と無条件の対話を主張してきた安倍首相が、一転して4項目の合意文書に応じたのは、追い詰められた結果であることは間違いない。今後、日中両国政府がこの合意を尊重し、遵守していくよう、しっかりと見守っていかなければならない。12月30日に新華社が発表した2014年の国際十大ニュースの一つに「中日が関係改善を図るうえの合意に達した」ことが含まれている。そうあってほしいという願いを込めた評価といえよう。世界は日中関係、日韓関係を改善することを望んでいる。世界の重心は中国を核とするアジアに移りつつある。そのなかで中国、韓国という大切な近隣との友好関係を築き、発展させることができなければ、日本は時代の潮流から取り残され、ますます小さな国になってしまう。北京APECにおける安倍首相の存在感の薄さはそれを予感させる

ものである。

神奈川県日中友好協会経済文化交流部会が12月13日に実施した経済文化講座では『中国国境 熱戦の跡を歩く』（岩波書店、岩波現代全書、2014年）を出版した石井明東京大学名誉教授に講演をお願いした。同書のサワリともいえるべき点を紹介していただいたが、1978年8月の日中平和友好条約締結交渉の会談記録のうち、尖閣諸島問題に関する部分のみ、会談記録が公開されていないとのこと。しかし園田直・外相や杉本信行・元上海総領事の記録等から、両国間で尖閣・釣魚島問題が話されたことは間違いない、会談記録が存在しないはずがない。中国側当事者である張香山の回想によれば、鄧小平が先にこの問題に触れたとあり、日本側当事者は日本が先に提起したという。「日中双方の記録を比較し、どちらが先に尖閣諸島問題に言及したかを含め、両者の間で実際にどのような共通の了解ができたのかを知ることは尖閣諸島問題を検討するうえで、大きな意味があります」（石井著241頁）として会談記録の開示を請求しても、外務省は「存在しない」の一点張り。開示を拒む外務省の不当な対応を、静かな口調ながらもはつきりと指摘する氏の報告は印象的であった。

2014年が終わろうとする12月31日、これに関連するビッグニュースがロンドンから届いた。NHKは

ニュースでイギリス公文書館の記録画像を映しながら以下のように報道した。

「尖閣は現状維持で合意」機密解除の英記録

12月31日 14時29分 <http://www3.nhk.or.jp/news/html/20141231/k10014374941000.html>

沖縄県の尖閣諸島を巡り、昭和57〔1982〕年、当時の鈴木善幸総理大臣がイギリスのサッチャー首相と会談した際、「中国との間で現状を維持することで合意し、問題は実質的に棚上げされた」とサッチャー首相に伝えた」とイギリス側が記録していたことが明らかにになりました。

これは昭和57〔1982〕年9月に当時の鈴木善幸総理大臣が来日したサッチャー首相と会談した際の内容をイギリス政府が記録したもので30日、機密解除されました。

それによりますと、鈴木総理大臣は沖縄県の尖閣諸島について、みずからが中国の当時の最高実力者鄧小平氏と会談した経験を紹介し、「日中両政府は大きな共通の利益に基づいて協力し、詳細についての違いはひとまず触れないことで一致したと伝えた」としています。

そして、記録は「鈴木総理大臣は、その結果、問題

を具体的に取り上げることなく現状を維持することで合意し、実質的に棚上げされた」とサッチャー首相に伝えた」としています。

当時、サッチャー首相はイギリス領だった香港の将来の統治の在り方について中国側と本格的な話し合いに臨もうとしており、鈴木総理大臣は、鄧小平氏との直接対話を勧めたということです。

日本政府は尖閣諸島に関して、わが国固有の領土であり、解決すべき領有権問題は存在せず、中国との間で「棚上げ」や「現状維持」で合意した事実もないという立場を一貫して示しています。

外務省幹部「『棚上げ』合意した事実ない」

これについて外務省幹部はNHKの取材に対し、「鈴木元総理大臣の発言は確認できていないが、尖閣諸島を巡って中国側と『棚上げ』することで合意したという事実はない。尖閣諸島は、歴史的にも国際法上もわが国固有の領土であるという日本政府の立場に変わりはない」としています。

NHKの取材を受けた外務省幹部は「鈴木元総理大臣の発言は確認できていない」と答えているが、外務省外交史料館書庫には「サッチャー英国首相夫妻訪日

(公賓)」という件名で欧州局西欧課が作成した2冊の簿冊が保存されている。その管理番号は201410824と201410825である。事実関係を確認しようと思えば外務省幹部ならすぐにできる。しかし彼はそれを怠り「尖閣諸島を巡って中国側と『棚上げ』することで合意したという事実はない。尖閣諸島は、歴史的にも国際法上もわが国固有の領土である」という日本政府の立場に変わりはない」とお決まりの回答でその場をしのいでいる。鈴木元首相が日本政府の立場に違反する内容をサッチャー首相に伝えたとしてもいうのだろうか。外務省幹部の不誠実な対応は批判されてしかるべきである。そのような発言を、公正さを装って報道するNHKの姿勢も問題である。筆者は1月5日に外務省外交史料館にこの件に関する日本側記録を閲覧することについての問い合わせをした。利用制限区分が「要審査」となっているからである。すると「個人情報」やら「警備情報」が含まれる恐れがあり、しかも案件が非常に多いため、審査に10カ月も時間を要するとのこと。公賓として日本を訪れたイギリス首相との日本の首相の会談は公的活動であり、公開すべきものであるし、警備情報などには関心がない。イギリス政府が公開した記録と日本政府の記録とを比較したいのだ、と説明しても頑として受け付けない。いくら話しても埒が明かない。日本の情報公開は実に

問題が多い、ということをあらためて実感した。

同じニュース報道でも共同通信ロンドン発半沢隆実の「尖閣『現状維持の合意』 82年日英首脳会談 鈴木首相が明かす」という記事のほうが問題点を的確にとらえている。筆者が見た新聞のうちでは『琉球新報』12月31日がもつとも詳細に報道している。

共同通信が伝える「尖閣諸島問題に関する鈴木善幸首相発言」\*1982年9月20日の日英首脳会談の記録中(原文は英語)は以下の通り。(『琉球新報』2面解説より)

鈴木氏はサッチャー首相に対し、鄧小平氏と一対一で率直な交渉をすることがいいだろうと助言した。

尖閣諸島の領有権をめぐる論争で、鈴木氏は特に鄧氏が協力的であるとの認識を持った。(鈴木氏によると)鄧氏は実際に、重要なのは(日中両政府が)共通の問題に集中し、小さな差異は脇に置くことだと述べ、尖閣諸島の将来は未来の世代の決定に委ねることができるとの考えを示した。これ以降、中国側は尖閣問題に言及することはなかった。

サッチャー氏に鄧氏との直接交渉を勧めた鈴木氏の助言は、論争となっている尖閣諸島について鈴木氏自身が鄧氏と直接交渉した経験に基づいている。その結

果、鈴木氏は（鄧氏と）、日中両国政府は大きな共通利益に基づいて協力すべきで、詳細に関する差異は脇に置くとの合意に到達した。（鈴木氏によると）その結果、（尖閣の）問題を明示的に示すことなしに現状を維持することで合意し、問題は事実上、棚上げされた。

共同通信は専門家の解説として矢吹晋・横浜市立大学名誉教授の話を紹介している。

外国首脳にまで尖閣諸島をめぐる問題を『棚上げした』との認識を首相自身が伝えているのは、日中関係において『棚上げ』の存在が当時、常識だったことを裏付けている。鄧小平氏が1978年に日本で記者会見し、尖閣について日中間で触れないことで合意したと明らかにした際に、日本は特に反論しておらず、異論がなかったと国際的に受け止められても仕方がない。日本政府が現在『棚上げはなかった』などと主張しているのは無理がある。日本政府は事実を認めた上で、日中関係の改善を図るべきだ。

「日中間に領土問題は存在しない」「棚上げはなかった」とする主張は完全に成り立たない。この島の問題について、日中両国政府は異なる見解を有している

という点についてはすでに昨年11月7日に合意しているのではないか。この合意をきちんと守ることが双方の信頼関係構築の第一歩である。見解が異なる場合、己の見解を主張するだけでは言い合いに終わってしまう、問題は解決しない。双方が相手の主張にきちんと耳を傾け、その主張に正しいところがあれば受け入れ、正しくないとは判断するのなら根拠を示して反論すればよい。そのような対話の繰り返しで相互理解は深まっていく。大切なことは事実を重視し、道理に基づき、かつ冷静な対話を実現することである。そのような真摯な対話を繰り返し積み重ねていけば、双方の信頼関係は構築されていく。

残念ながら政府間でそのような関係が早急に実現するとはとても思えない。各界各層のさまざまな形の良い交流・対話を押し進めるなかで、歴史を前進させる努力をするしかない。本書が少しでも貢献できれば幸いと思っている。

本書は日中双方のさまざまな人々との交流・対話の成果である。刊行にあたっては花伝社のみなさん、とりわけ平田勝社長と山口侑紀さんにお世話になったことを記して感謝の意を表します。

2015年1月5日 村田忠禧



# 「東京漢点字羽化の会」第110～112回

## 例会報告とわたくしごと

木村 多恵子



2015年1月の例会（第110回）1月7日（水）  
13…30～15…30、場所、港区ヒューマンプラザ

7階竹芝小ホール

1月21日にIさんとSさんが横浜へ印刷に行ってくださいることになった。何時もIさん、Sさんありがとうございます。

朝日の記事入力グループの組み合わせを組んでいた。朝日の記事入力グループの組み合わせを組んでいた。

横浜の『萬葉集釋注』の進み具合と岡田さんが読んでの魅力について報告をした。

1月25日の横浜での「羽化新年会」には、東京から6人の方が参加することになった。

会計から新年会費の負担を少ししてくださることになった。

会員を募るためのちらしをNさんに印刷していただき、引き続き一般の方の目に触れていただけるよう努力することにした。

岡田さんがやや詳しく学習会の報告をした。

「文字について」何時ものように岡田さんが詳細に

話された。

4月の日程を打ち合わせた。

新しい会員の希望により2月の例会の中で入力の実践についてミニ講習会を行うことにした。

2015年2月の例会（第111回）2月18日（水）

13…30～15…30、ヒューマンプラザ7階第1会議室  
何時ものように朝日の記事入力グループ分けを決めた。

3月18日、Iさんと、Sさんが、横浜へ印刷に行ってくださいることになった。Iさん、Sさんよろしくお願ひいたします。

「東京羽化の会」の会則と役員を確認した。

2月21日に新しい会員が参加される。

岡田さんから入力依頼されたものが完成し、岡田さんからお礼が述べられた。

『常用字解』に加えられた66文字を、横浜と分担して入力していただけるようお願いした。資料は3月の定例会に用意できる予定。

古語辞典に関する話、そして朝日の「歴史学」の書き方について確認があった。

続いて、新しい会員から漢点字の入力方法について、実践に即したやり方を直接教えて欲しい、との希望に応じて、今回は例会の中で行なった。

2015年3月の例会(第112回) 3月11日(水)

13:00 ~ 15:30、ヒューマンプラザ7階第2会議室

何時ものように朝日の「歴史学」のグループ分けをした。

3月18日の印刷を改めてお二人にお願いし、滞りなくお仕事をしてくださった。Iさん、Sさん何時もありがとうございます。

当会役員その他についてNさんからご報告をいただいた。

会員募集について、ちらしなど報告した。

「古語辞典」のグループをこのあたりで再編成することにし、3グループにした。

「常用字解」の第2版が出版され、見出し文字が増加されたが、人名字解からの移行文字もあるが、新たに加えられた文字66文字を、横浜の皆様と入力分担することになった。これまで横浜の皆様が手がけてくださった経験を生かし、大半は横浜で入力していただき、東京では25文字を受け持つことにし、入力、第一校正、第二校正などグループ編成をした。「常用字解」を入力するのは東京では初めてなので、そのための「入力マニュアル」を岡田さんから送っていただいた。

岡田さんが、基本的な入力方法について、新しい会員のために説明した。

### \* 予告

4月の例会(第113回) 4月8日(水) 13:00 ~ 15:30

ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

4月の学習会(第88回) 4月18日(土)

18:30 ~ 20:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

5月の例会(第114回) 5月13日(水) 13:00 ~ 15:30

ヒューマンプラザ7階竹芝小ホール

5月学習会(第89回) 5月23日(土) 18:30 ~ 20:30

ヒューマンプラザ第2会議室

6月の例会(第115回) 6月10日(水) 13:00 ~ 15:30

ヒューマンプラザ7階第1会議室

6月の学習会(第90回) 6月20日(土)

18:30 ~ 20:30

ヒューマンプラザ7階第2会議室

### わたくしごと

沢山読んだとは言えないけれど、お話や物語を読んだり聞いたりするのは、子供の頃から好きだった。

どんな内容が好きだったのか、今になってその理由を考えると、あたりまえだが、わたし自身の気質によるのだと思う。

英雄物語や秀でた才能の持ち主が出て来る物語はわたしをおののかせ、少し後ずさりさせられる。

特別に優れたファンタスティックなものも、わたしの想像力は付いてゆけない。

主人公の知恵と才覚を生かすことで、知恵比べや、物語が広がり発展するものは、おもしろいけれど、自分で先を予測する余裕はない。

そのような冒険ファンタジーは、現実から離れ過ぎて、あれは異次元の世界だ、と本当の共感を持ってなかった。

どうしてアリスが鏡の中に入って行けるのか理解できず、上級生に聞くと、「空想物語だからよ」と言われて、それで、「不思議の国のアリス」なの？「そうか、わたしとぜんぜん違う世界があるのだ」と自分の世界からいつの間にか、納得できないものはじき飛ばしていた。

あまりにも悲劇的なものは、悲しくて苦しくて心が痛い。

まま母物語は、たいいてい性質のよくない人物として、継母や義理の兄弟が登場することが多く、これも心地が悪い。

置かれた立場によって、そうならざるを得ない意地の悪さはあっても、底意地の悪い性質の持ち主が登場するのも辛い。

戦争ものにもついてゆけなかった。

初めて読んだそれらの本について、子供であるから断定的に好き嫌いを決めただけではなく、本そのもの

を読むのは楽しみながらも、無意識のうちにわたしの実生活には縁遠いものと思っていた。

おおぼら吹きものは、手放して笑えるほど鷹揚でもない。

つまり、まったくおもしろみのない、生真面目と言ふより、いろいろなことに頭を働かせる知恵も想像力もない単なる「おぼかさん」だった。

恥ずかしいことだけれど、大人になっても怖い話を聞いたり読んだりした当座は、何日も夜一人でトイレに行けなかった。それは、結婚してから20年くらい続いていた。

どうしても行かなければならないときは、夫を起こして一緒に行ってもらった。13段の階段を降りるだけの狭いアパートにいたのだから、普通ならたいしたことはないはずなのに、一人では行けなかった。

一人で階段をのぼっていると、下からだれかがわたしの足を掴んで引つ張られそうに恐ろしかった。恐ろしくて怖くて、夢中で駆け上がった。動悸が激しくて息が苦しい。自分の寢床にとびこんで、布団を頭からかぶり、足を縮めていないと安心できなかった。

夫に着いて行ってもらうときは、わたしが先に階段をのぼり、夫にはあとからついてきてもらっていた。

とうとうある日、彼は「いい加減にしろ」と言った。

わたしも子供じみている、申し訳ないと思っ

たものの、つい甘えていた。

それからは仕方なく勇気を起して一人で行った。

こんなふうによく書くと、さぞや子供の頃、母親にべつたり甘えていたように誤解されそうであるが、現実には決してそうではない。それどころか5才のときから寮生活をしていた。それ以前にも両親に甘やかされた自覚的な記憶はないので、本当はもつと早く大人になっていなければならなかったはずだ。

寮では、いくらわたしに夜中に一人でトイレへ行けないと思っても隣に寝ている友達や上級生を起ここそうとは絶対に考えなかった。

そんなときは仕方なく足音を立てないように、つま先立ちで寮の長い廊下を走って往復していた。

あるとき上級生が昼間わたしにそつと聞いた。「多恵子ちゃん、夜中に廊下を走っていたでしょう、どうして？」

わたしは恥ずかしいのと、うるさい音を立てて、叱られるのかとぎくりとした。

「うるさかった？」

「いいえ、たまたまわたしは目が覚めていたから分かったの」

「ご免なさい」

「いいえ、誰もそれで起こされてはいないからいい

の。でもどうして夜中に走っていたの？」

「あのうー、トイレへ行くのが怖いの」

「そう、それで駆けだしていたのね」

「はい、ごめんなさい」

「だから、だれも知らないからいいの。ただわたしはどうして真夜中に走っているのか知りたかったの。だれにも言わないから心配しなくていいのよ」

それ以来夜中に起きなくて済みますように、と、一層願うようになった。

こんな臆病者であるから、日常的に読む本も、強烈な個性のもの、心痛むものは、読後暫くは平静ではいられなかった。

そんな本の中で、わたしをほつとさせ、安心させてくれたものがある。小学3年のころに読んだ、グリム童話集の中の「こびとの靴屋」である。

#### (粗筋)

貧しい靴屋の夫婦がいた。一生懸命働いているが、暮らしは一向に楽にならない。

とうとう1足の靴を作るだけの皮をかうお金がなくなつた。「これが最後の仕事か」と寂しくつぶやきながら、おじいさんはその1足を作るために皮を裁断して、明日の朝、仕上げる段取りを整えて、仕事台に

皮を揃えて寝た。

明くる朝、夫婦が驚いたことに、見事なでき映えの靴が仕事台に乗せてあった。しかも、その日のうちにお客さんが買いに来て、とても履き心地がよいと言つて、普段の2倍の値段で買つてくれた。

そこでおじいさんは、2足分の皮を買つて、夜のうちに裁断して、仕事台に用意して寝た。

翌朝目覚めると、2足の靴が出来上がつて仕事台にきちんと揃えてあった。この2足もその日のうちに2倍の値段で売れた。

次の晩は4足分、その次は8足分、次は16足分と増えていった。丈夫で履き心地のよい靴だという評判が評判を呼んだ。夫婦はどうしてこんな不思議なことが起きるのか、誰が作つてくれるのか分からず、ある夜、二人は物陰からそつと様子をうかがつていた。

夜が更けると二人のこびとが、裸で、窓から入つてきて、

「ぼくらは小さな靴職人、／すてきな靴を作りましょう、／みんなが喜ぶすてきな靴を」

こびとたちは歌を歌いながら、皮を縫つたり叩いたり、テンポよく、せつせと靴を全部作つて出ていった。

驚きながら夫婦は相談した。

「お札にこどもたちに合う靴を作ろう」

「そうですなえ、わたしはズボンと上着、それに靴下を作りましょう」

夫婦は早速仕事をし、夜になると、いつもの仕事台に二組のズボンと上着と靴下と靴をきちんと揃えて置いた。

そうして今夜も夫婦は物陰からこつそりながめた。

現れたこびとたちは言つた。

「皮がない！ なにかあるぞ」

ふたりは置いてあつた服を着て靴を履いた。

「わあー、びつたりだ。／ぼくらは小さなおしゃれさん、／ぼくらは裸じゃないんだよ、／もう、靴屋じやなくなつた」

二人は跳ねたり踊つたりしながら窓から出て行つた。

「ありがとう！ これからはあんたたちに負けないように、わしを作る」

それ以来こびとの靴屋は来なくなつたが、夫婦の暮らしは豊かになつた。

という筋である。

この小さなお話には、楽しくて明るくて優しい人だけが登場している。何と心を和らげてくれる話だろ

う。貧しくても、このおじいさんとおばあさんは、いたわり合い、いつでも協力しあっている。精一杯自分たちで努力し、「だれか助けてください」なんて人に頼ったり、神様に願ったりしていいない。あるがままに、自分たちでできることをしている。高望みもしていない。そして穏やかな暖かい心根だ。欲張らない。謙虚だ。

二人の小さな靴職人も、楽しそうに歌いながら仕事をしている。この二人も多くを期待していない。

自分たちにぴったり合うズボンと上着と靴と靴下を受け取ることで、全てを諒解し、歌と踊りで、おじいさんとおばあさんにお礼とさようならを告げている。

わたしにはこの話は究極のファンタジーに思える。

最初にこの本と出会って以来、おおよそ60年あまり過ぎたが、わたしの心にこの話のエッセンス、この穏やかな老夫婦や、小さな靴職人のような素朴で汚れない、「良きひと」ではないわたしだけれど、彼らを模範として生きてゆきたいと思ってきた。

遅い気つきであるが、なぜ英雄の苦難を経て人間の真実を求める、あの壮絶な冒険物語が子供の成長期に必要なのかということが、やっと40代前後になって本格的に理解できるようになったわたしは、J・R・

R・ トールキンの『指輪物語』やオトフリート・プロイスラーの『クラブアート』を震えながらも読めるようになった。

今、現実の荒れ狂う世界の陰惨なこと、信じがたい凶悪なこと、どうしてここまで理不尽なことが起きるのだろう？ ニュースを聞かたびに、わたしの心は壊れていきそうだ。それでも他人の悲しみを見ずにいる、避けて通るというのは「人として あるまじき行為」だと思っている。それこそ「自分さえ平安で幸せであればいい」という、安易な考えは、自己中心という「罪」になる。

せめて一日に1度ニュースを聞くことにしているが、身も心も縮みあがりそうな恐ろしいことが毎日耳に入り過ぎ、日常の平和が脅かされており、本当に、わたし自身が壊れていきそうなのごろである。現実のニュースに圧倒されながら、何が正しいか、真実を見極めることがどれほど難しいことか、そのためにこそ勇気と知恵が必要であり、平和を保つためには戦わなければならないということも知っている積もりだけれど、現実には戦うのはそう簡単ではない。

2015年3月24日（火）

# 東京漢点字 学習会報告

東京漢点字羽化の会 菅野良之

## 平成26年度 第9回 (第85回) 報告

1 日時 平成27年1月17日 (土)

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第2会議室

3 出席者 (省略)

4 周知事項

・ 学習会予定 2月21日(土)、3月28日(土)

いづれも第2会議室

・ 羽化の会合同新年会 1月25日(日)

5 学習会内容

使用教材 漢点字 講習用 テキスト

初級編第6回

8 複合文字 (4)

2. 紹介し落とした文字、および基本文字にない

象形文字・会意文字二十二字

### ア 前回の復習

(41) 「妻」

と(サ・1・2・6の点)で表す。

### イ 今回の学習

(42) 「勝」

1・6の点)で表す。部首の「月」は「ふなづき」で「朕」「膳」「藤」「膝」「籐」などの文字に含まれる。字式はふなづき十ソ天V力。又は朕V力。音読みのシヨウは漢・呉音。テキスト以外の熟語には「祝勝」「圧勝」「勝馬」「辛勝」「一発勝負」「一本勝負」「一、六勝負」「勝ち軍(いくさ)」「勝ち越し」「勝ち名乗り」「勝鬃」「勝ち誇る」「先手必勝」「殊勝」「勝手(気儘)」「男勝り」「遠慮勝ち」。人名、地名に「勝浦」「勝沼」「勝海舟」「新勝寺(成田山)」など。


※ 「直」


・ 2・3・4・5・6の点)をパーツとして含む文字二つ。

(43) 「植」

6の点)と木(キ・1・2・6の点)で表す。字式は木偏十直。音読みのシヨクは漢音。訓に「たてる」

がある。テキスト以外の熟語には「植樹」「田植え」「植木(鉢)」「植込み」「植付け」「観葉植物」人名に「植村」「植田」などがある。

(44) 「値」 人偏(ナ…1・3の点)と直(メ…1・2・3・4・5・6の点)で表す。字式は人偏十直。音読みのチは漢音。テキスト以外の熟語には「チ」と読むものに「価値」「期待値」「近似値」「細小(大)値」「偏差値」。「ね」と読むものに「元値」「売値」「言い値」「卸値」「終値」「捨て値」「高値」「値打」「値引き」「値札」。「あた」には「値千金」などがある。「あた」には「値千金」などがある。

(45) 「針」 金偏(カ…1・6の点)と十(ロ…2・4・5の点)で表す。本来の字ではない。十は先が尖ったものを意味する。字式は金偏十。音読みのシンは漢・呉音。テキスト以外の熟語には「シン」と読むものに「按針(アンジン…水先案内人)」「検針」「時計(じしん…時計の短針)」「針葉(広葉)」「針小棒大」。「はり」と読むものに「お針子」「鉤針」「返し針」「待ち針」「釣針」「針のむしろ」「毒針」「針千本」「針土竜(はりもぐら)」。「心の針(心の中に抱く害意)」。「特殊な読みに「針

魚(さより…一般的には細魚)」「針孔(みず…針眼とも。針の糸を通す孔)」など。

## 平成26年度 第10回(第86回) 報告

1 日時 平成27年2月21日(土)

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第2会議室

3 出席者(省略)

4 周知事項

・学習会予定 3月28日(土) 4月18日(土)

いずれも第2会議室

5 学習会内容

使用教材 漢点字 講習用 テキスト


初級編第6回

8 複合文字(4)

2. 紹介し落した文字および基本文字にない

象形文字・会意文字二十二字

ア 前回の復習

(42) 「勝」 月(ラ…1・5の点)と(カ…1・6の点)で表す。原形は「船」。傍の部分は朕／力。「力」は農具を意味する。力の外に「膝」「騰」



「譽」などを含む文字がある。

(43) 「植<sup>●●●●</sup>」 直(メ<sup>●</sup>・1・2・3・4・5・6の点)と木(キ<sup>●</sup>・1・2・6の点)で表す

(44) 「値<sup>●●●●</sup>」 人偏(ナ<sup>●</sup>・1・3の点)と直(メ<sup>●</sup>・1・2・3・4・5・6の点)で表す。形成文字。

(45) 「針<sup>●●●●</sup>」 金偏(カ<sup>●</sup>・1・6の点)と十(ロ<sup>●</sup>・2・4・5の点)で表す。「十」は縫い針。

## イ 今回の学習

挿入愛唱歌 「精霊流し」 合唱

3. 紹介し落した文字および基本文字にない  
象形文字・会意文字二十三字

※「昔<sup>●●●●</sup>」(リ下がり<sup>●</sup>・2・3・6の点とネ<sup>●</sup>・1・2・3・4の点)とそれをパーツとして含む文字一つ。

(46) 「昔<sup>●●●●</sup>」 リ下がり(2・3・6の点)とネ(1・2・3・4の点)で表す。字式はサ一/日。

「日」は太陽、「サ一」は干し肉(保存食)を意味する。音読みのセキは漢音、シヤクは呉音。テキスト以外の熟語には「昔馴染み」「昔日(せきじつ・昨日)」「昔歳(せきさい・去年)」「昔年(せきねん・とうのむかし)」「一昔(ひとむかし・今は10

年。もとは17、21、33年)」「昔氣質(むかしかたぎ)」「『今昔物語』(日本最大の古代説話集。12世紀前半の成立か。編者は未詳。全31巻で23巻が現存。

天竺 || インド5巻、震旦 || 中国5巻、本朝21巻、震旦 || 中国5巻、本朝21巻。卷、震旦 || 中国5巻、本朝21巻。一千余りの説話で中心は仏教説話が3分の1以上。漢字と仮名文。宣命書きで各説話は「今は昔:」で始まる。)

(47) 「借<sup>●●●●</sup>」 人偏(ナ<sup>●</sup>・1・3の点)と昔(ネ<sup>●</sup>・1・2・3・4の点)で表す。字式は人偏+昔。音読みのシヤクは呉音、セキは漢音。テキスト以外の熟語には「借物(かりもの)」「借入れ」「借入金」「借り住まい」「飯借り(ままかり)」「仮借無い(かしゃくな、い(見逃したり許したりしないこと)」「貸借」「寸借(すんしゃく・ちよつとの間、僅かな金を借りること)」「借景(しゃつけい・庭園外の遠山や樹木を庭に見立てたもの)」「セキ」と読む熟語は不明。

(48) 「倉<sup>●●●●</sup>」 リ(1・2・5の点)とオ(2・4の点)で表す。字式は、やね/一/日タレ/口。音読みのソウは漢・呉音。テキスト以外の熟語には「校倉(あぜくら)」「倉庫」など。岡倉・大倉・小倉・赤倉・鎌倉・佐倉・板倉・朝倉・島倉・高倉など人名、地名に多い。

※「品」(口(レ・1・2・4・5の点と三・1・4の点)の下に木(キ・1・2・6の点)が置かれた形をつくりとする文字一つ。

(49) 「操」 手偏(テ・1・2・3・4・5の点)と品(ウ・1・4の点)で表す。字式は手偏+品/木。音読みのソウは漢音。テキスト以外の熟語には「体操」「新体操(ボール、縄、輪、リボン、棍棒の五器具を操る)」「節操」「常操(常に変わらない節操)」「志操(守って変えない志。堅い操)」「操業(①機械を使う。②船で漁をする)」「操行(日頃の行い)」「操觚者(そうこしや…文筆に従事する人。新聞・雑誌の記者など)」

## 平成26年度 第11回(第87回) 報告

1 日時 平成27年3月28日(土)

18時30分～20時30分

2 場所 ヒューマンプラザ7階 第2会議室

3 出席者(省略)

4 周知事項

・学習会予定 4月18日(土) 夜間 第2会議室

5 学習会内容

使用教材 漢点字講習用 テキスト 初級編第6回

8 複合文字(4)

2. 紹介し落した文字および基本文字にない  
象形文字・会意文字二十二字

### ア 前回の復習

挿入愛唱歌 「精霊流し」 合唱

3. 紹介し落した文字および基本文字にない

象形文字・会意文字二十三字

※「昔」(リ下がり・2・3・6の点とネ・1・2・3・4の点)とそれをパーツとして含む文字一つ。

(46) 「昔」 リ下がり(2・3・6の点)と

ネ(1・2・3・4の点)で表す。

(47) 「借」 人偏(ナ・1・3の点)と昔

(ネ・1・2・3・4の点)で表す。

(48) 「倉」 リ(1・2・5の点)とオ(2

・4)で表す。字式は省略。

※「品」(口(レ・1・2・4・5の点と三・1・4の点)の下に木(キ・1・2・6の点)が置かれた形をつくりとする文字一つ。

(49) 「操」 手偏(テ・1・2・3・4・5

の点)と品(ウ・1・4の点)で表す。偏(部首)の部分と異なる文字に、躁、燥、練、藻、噪、慄、澡、などがありいずれも音読みは「ソウ」である。

イ 今回の学習

※「束」(キ…1・2・6の点と5・6の点)とそれをパーツとして含む文字一つ、プラス一つ。

(50) 「束」(キ…1・2・6の点と5・6の点)で表す。字式は略。音読みのソクは呉音、シヨクは漢音。テキスト以外の熟語に「花束」「不束者(ふつつかもの)」「結束」「装束(しようぞく或はそうぞく)」「二束三文」「覺束無い(おぼつかない)」「拘束」「検束(束縛に同じ)」。シヨクの読みの熟語は不明。

(51) 「速」(キ…1・2・3・6の点)と束(5・6の点)で表す。字式はしんによう①十束。音読みのソクは漢・呉音。テキスト以外の熟語に「逸速し(いちはやし)。「逸」は当て字。靈感がいちじるしい。手厳しい。強烈。切実。性急。他に先駆けてすばやい。などの意)」「風速」「音速」「光速」「高速」「快速」「失速」「球速」「神速(しんそく)・人間わざとは思えないほど速いこと)」「速攻」「速効」「拙速(せつそく)・仕上がりは下手でもやり方が早い。対語「巧遅」)」「速読」「速筆」「速記」「速報」「敏速」「速乾」「速射」。氏名・地名に「速水(はやみ)」など。

・束に似た文字「束」(とげ) 1の点と1・2・6の点と5・6の点)を含む文字。

(52) 「策」(チ…1・2・3・5の点)と束(5・6の点)で表す。字式は竹冠/束。音読みのサクは漢音。テキスト以外の熟語に「画策(計画を立てる)」「姦策・奸策(かんさく)・悪いたくらみ)」「奇策(奇抜なはかりごと)」「詭策(敵を欺くはかりごと)」「策案(はかりごと)」「施策」「失策」「得策」「散策」「金策」「愚策」「万策」「秘策」「苦肉の策」など。

(53) 「潮」(ニ…1・2・3の点)と朝(リ下がり)・2・3・6の点、朝の「日」の部分)で表す。字式はさんずい十朝。音読みのチヨウは漢音。テキスト以外の熟語に「赤潮(プランクトンの異常増殖で海水が変色。魚貝類に被害。苦潮(にがしお)、厄水(やくみず)とも)」「潮浴び(海水浴)」「潮垢離(しおごり)・海水を浴びて身を浄める)」「潮時」「潮騒(波の音)」「潮力発電」「潮汁(しおみず)」「渦潮」「防潮」。人名に「海音寺潮五郎」「地名に「潮岬(しおのみさき)・和歌山県の地名、本州最南端)」「潮ならぬ海(淡水湖。琵琶湖を指す。)など。

出師表 (六)

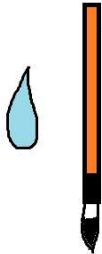
涙、あふれ出て止まず

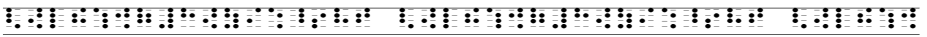
至<sup>リ</sup>下<sup>ス</sup> 於<sup>テ</sup> 斟<sup>ニ</sup> 酌<sup>シ</sup> 損<sup>ヲ</sup> 益<sup>ヲ</sup> 進<sup>ミ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 盡<sup>ス</sup>  
 忠<sup>ニ</sup> 言<sup>フ</sup> 則<sup>チ</sup> 願<sup>ハス</sup> 陛<sup>下</sup> 之<sup>ヲ</sup> 託<sup>ス</sup> 臣<sup>ニ</sup> 允<sup>ズ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 討<sup>テ</sup> 賊<sup>ヲ</sup> 興<sup>ス</sup> 復<sup>ス</sup> 罪<sup>ヲ</sup> 以<sup>テ</sup> 効<sup>ヲ</sup> 告<sup>ス</sup> 先<sup>ニ</sup> 効<sup>ヲ</sup> 以<sup>テ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 帝<sup>ノ</sup> 則<sup>チ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 治<sup>メ</sup> 則<sup>チ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 靈<sup>ニ</sup> 臣<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 罪<sup>ヲ</sup> 以<sup>テ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 言<sup>フ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 咎<sup>ヲ</sup> 則<sup>チ</sup> 責<sup>メ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 彰<sup>ニ</sup> 攸<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 亦<sup>ニ</sup> 宜<sup>シ</sup> 咎<sup>ヲ</sup> 則<sup>チ</sup> 責<sup>メ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 彰<sup>ニ</sup> 攸<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 道<sup>ヲ</sup> 察<sup>ス</sup> 宜<sup>シ</sup> 咎<sup>ヲ</sup> 則<sup>チ</sup> 責<sup>メ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 彰<sup>ニ</sup> 攸<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 帝<sup>ノ</sup> 遺<sup>ニ</sup> 察<sup>ス</sup> 宜<sup>シ</sup> 咎<sup>ヲ</sup> 則<sup>チ</sup> 責<sup>メ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 彰<sup>ニ</sup> 攸<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 感<sup>ニ</sup> 帝<sup>ノ</sup> 遺<sup>ニ</sup> 察<sup>ス</sup> 宜<sup>シ</sup> 咎<sup>ヲ</sup> 則<sup>チ</sup> 責<sup>メ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 彰<sup>ニ</sup> 攸<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 涕<sup>ニ</sup> 感<sup>ニ</sup> 帝<sup>ノ</sup> 遺<sup>ニ</sup> 察<sup>ス</sup> 宜<sup>シ</sup> 咎<sup>ヲ</sup> 則<sup>チ</sup> 責<sup>メ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 彰<sup>ニ</sup> 攸<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 泣<sup>シ</sup> 激<sup>ニ</sup> 遺<sup>ニ</sup> 察<sup>ス</sup> 宜<sup>シ</sup> 咎<sup>ヲ</sup> 則<sup>チ</sup> 責<sup>メ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 彰<sup>ニ</sup> 攸<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 不<sup>レ</sup> 今<sup>ニ</sup> 詔<sup>ヲ</sup> 納<sup>シ</sup> 自<sup>ラ</sup> 以<sup>テ</sup> 責<sup>メ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 彰<sup>ニ</sup> 攸<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 知<sup>レ</sup> 当<sup>ラ</sup> 臣<sup>ニ</sup> 雅<sup>ニ</sup> 謀<sup>ニ</sup> 彰<sup>ニ</sup> 攸<sup>ニ</sup> 若<sup>シ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 所<sup>ヲ</sup> 遠<sup>ク</sup> 不<sup>レ</sup> 言<sup>フ</sup> 以<sup>テ</sup> 其<sup>ノ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 無<sup>シ</sup> 興<sup>ス</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 云<sup>フ</sup> 離<sup>レ</sup> 勝<sup>ヘ</sup> 深<sup>ク</sup> 諮<sup>ニ</sup> 慢<sup>ヲ</sup> 禕<sup>ノ</sup> 允<sup>ズ</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 臨<sup>レ</sup> 受<sup>ケ</sup> 追<sup>フ</sup> 諷<sup>シ</sup> 陛<sup>下</sup> 允<sup>ズ</sup> 德<sup>ヲ</sup> 之<sup>ヲ</sup>  
 表<sup>ニ</sup> 恩<sup>ヲ</sup> 先<sup>ニ</sup> 善<sup>ク</sup> 下<sup>モ</sup> 等<sup>ノ</sup> 之<sup>ヲ</sup> 先<sup>ニ</sup> 効<sup>ヲ</sup> 以<sup>テ</sup> 之<sup>ヲ</sup>

参照図書

『朗読してみたい中国古典の名文』渡辺精一(祥伝社新書)

損益を斟酌(しんしゃく)し、進みて忠言を尽くすに至りては、則ち攸之(ゆうし)・禕(い)・允(いん)の任なり。願わくは陛下臣に託するに討賊興復(こうふく)の効を以てせよ。効あらずんば則ち臣の罪を治めて、以て先帝の靈に告げよ。若し徳を興すの言無くんば、則ち攸之・禕・允らの咎(とが)を責めて、以て其の慢(まん)を彰(あきら)かにせよ。陛下もまた宜しく自ら謀(はか)りて、以て善道(ぜんどう)を諮諷(ししゆ)して、雅言(がげん)を察納(さつのお)して、深く先帝の遺詔(いしよう)を追うべし。臣、恩を受けし感激に勝(た)えず、今、遠く離るるに当たり、表に臨みて涕泣(ていきゅう)し、云う所を知らず。





(前半は省略、後半部分より)

若シ無クンバ

興コス徳ヲ之言、則チ責メ  
 テ攸之・允等之咎ヲ、以  
 テ彰カニセヨ其ノ慢ヲ。陛下  
 モ亦ベシ宜シク自ラ謀リテ、  
 以テ諮諏シ善道ヲ、察納  
 シテ雅言ヲ、深ク追フ先帝  
 ノ遺詔ヲ。臣不勝へ受ケ  
 シ恩ヲ感激ニ、今当タリ遠  
 ク離ルルニ、臨ミテ表ニ涕泣  
 シ、不知ラ所ヲ云フ。  
 ~ 示偏 + 韋、なめしがわい

※ 「禱」は、JIS第2水準以下にない漢字。  
字式で字の形を説明し、よみを記しています。

ゆうし い いん  
攸之・禱・允 は、前述にもある信頼できる臣下達の名。

魏への出陣を前にした蜀の宰相、諸葛亮(孔明)の上奏文「(出師表)」は、上記の文をもって終わります。



## 「報告とご案内」

### 一 賛助会費のご納入

大変ありがとうございました

昨年度・平成二六年度に、賛助会費を頂戴致しました皆様のご芳名をご報告致します。

大滝正雄様、日本漢点字協会・川上リツエ様

村田忠禧様、河村美智子様、武田幸太郎様

遠藤幸裕様、田崎吾郎様、高橋かず様

政井宗夫様、関口常正様、中村裕一様

以上、厚く御礼申し上げます。本会の活動に、有益に使用させていただきます。

### 二 『萬葉集釋注』第三巻が完成致しました

二〇一二（平成二四）年度から、横浜市中央図書館に納入して参りました『萬葉集釋注』（伊藤博著、集英社文庫）の第三巻の漢点字版が完成致しました。この二月末に、二〇一四（平成二六）年度分として、同

館に納入致しました。全国の図書館・点字図書館を通して、貸し出されます。大いにご利用下さい。

毎年のごことではございますが、入力・校正・編集の作業を前年末までに終えて、年明けとともに点字プリンタによる打ち出しを行っていただきました。そして手作業の製本作業という工程を経て完成致しました。今回も九分冊です。コンピュータでの作業が中心とは申せ、入力と校正は、ほぼ手作業ばかりと言えますし、最後の製本は、人の手だけが頼りの、文字通り手作りの暖かみたっぷりの漢点字書です。

本書は万葉集二十巻のうち、巻五・巻六が収録されており、巻五は、大伴旅人の盟友である山上憶良の作品が中心に置かれております。赴任先の太宰府や帰任してから、あるいは任を辞してから詠まれた作と思われる秀作が並んでおります。「日本挽歌（にほんばんか）」（旅人へ贈られたその妻・郎女への哀悼）、「嘉摩三部作」（人間の煩惱と愛執の苦しみ）、「貧窮問答（びんぐうもんだふ）の歌」（民衆の貧窮の苦しみと苛斂誅求）、そして最晩年の「沈痾自哀文（ちんあじあいぶん）」（宿痾の苦しみと人生の晩年の哀愁）などを歌い上げ、憶良自身の逝去が告

げられます。

巻六は、聖武天皇治下の宮廷歌人による作品によって編まれております。持統天皇の後文武天皇を挟んで元明天皇・元正天皇と二代に渡る女帝の後を受けて、文武天皇の皇子・聖武天皇が即位します。待望の男帝の誕生です。

待望されていたとはいえその前の祖母・元明天皇は「大宝律令」の制定、和同開珎の発行、『古事記』の編纂、伯母・元正天皇は『日本書紀』の編纂、『養老律令』の編纂という、現代で言えば国歌の近代化に力を注いだ天皇です。

聖武天皇の統治は定まらず、藤原広嗣の乱の鎮圧に成功した後、都を点々と移しました。そのような宮廷に集う歌人の作が、この巻を飾っております。額田王・柿本人麻呂から始まる万葉の宮廷歌人の伝統も、国家の変遷と宮廷内の担い手の変化によって、衰えを見せて参ります。

万葉集は二十巻からなっておりますが、この巻一から六までが、「小万葉集」と呼ばれております。万葉集としての一つの世界が、この六つの巻に集約されていることを意味しているものと思われれます。漢点字の

読者の皆様、是非ご一読下さい。

### 三 ホームページをリニューアル

本会のホームページがリニューアルされました。ご笑覧下さい。

またご意見・ご希望などお寄せいただければ幸いです。

### 四 新年会を開催しました

去る一月二十五日（日）、例年通り、新たな年を迎えて、新年会を開催致しました。新会員・学習者を交えて、賑々しく催されました。滞りなく活動を遂行すべく、心を新たにしました。

### 五 休載

毎号連載しております『点字から識字までの距離』（山内薫）は、著者のご都合により、今号は休載させていただきます。次号をお楽しみに。



## 編集後記

現在の日本語の状態です。漢字が伝来する以前の日本語は、当然のこととして話し言葉だけだったわけで、それをそのままひらがなで表しても十分に通じるものだったはず。しかし、漢字が伝来して、漢字かな交じりで日本語が表示されるようになる、その形がどんどん進化して、今度は漢字なしでは思うことが表せないという、日本語独特の文化ができあがってしまいました。最近はその上に外来語が氾濫し、いつの間にか日本語独特のカタカナ語の世界が築かれつつあります。岡田さんがいつておられるように、漢字を知らない人は非識字の状態にあるというの正しいことと思われ。彼等を「識字」の状態に置くためには、漢点字を習得していただかなければなりません。その漢点字の習得を目指そうとする人があまり多くないというのが、われわれこの活動に協力している者たちの残念に思うところです。

(木下 和久)

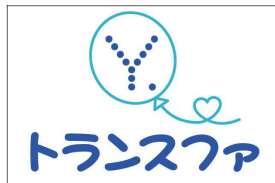
## (有) 横浜トランスファ福祉サービス

障害者自立支援法の下、障害者にガイドヘルパーを派遣して、外出を支援しています。対象は、横浜市在住・在宅の、視覚・肢体・知的重度障害者。

常時募集・ガイドヘルパー：資格・ホームヘルパー2級以上、および視覚・肢体障害者移動介護研修修了。

業務概要：上記障害者の外出支援。詳細は担当・柳田まで。

研修者募集：弊社では、ガイドヘルパー（視覚障害者）の資格取得研修を実施致します。詳細はホームページ（[www.ytrans.net](http://www.ytrans.net)）で。



〒231-0063 横浜市中区花咲町1-46-1

GSプラザ桜木町1104

電話： 045-263-0306

FAX： 045-263-0316

E-MAIL (岡田健嗣) : [okada\\_tr\\_eib@ybb.ne.jp](mailto:okada_tr_eib@ybb.ne.jp)

横浜漢点字羽化の会 URL : <http://www.ukanokai-web.jp/>

《表紙絵 岡 稲子》 次回の発行は7月15日です。

※本誌(活字版・DAISY版・ディスク版)の無断転載は固くお断りします。